

八月二一日（金）

朝食を終え、早々にテレビの前で遊び始める亜衣と、隣でそれを見ている映美。私は食器を洗いながら、いつもよりエンジンの掛かりが悪そうな夫を眺めていた。彼はボサボサの寝癖を気にすることなく、ぼんやりとテレビや子供たちの方へ目を向けている。

「本当に、迎えに来てもらわなくてよかったの？」

目の前で流れる水の音に負けないよう、少し大きめの声で言った。彼は頷いて、ゆっくりと振り返った。大きな欠伸をしながら、「僕が運転するよ」と答えた。

「最近、雄輔さんに頼ってばかりだし。帰りは電車って訳にもいかないし」

実家までの送り迎えぐらいなら、雄輔は喜んでやってくれると思うけど、彼なりに何か引つかかっているのだろう。

「無理してない？」

彼は自信たっぷり「大丈夫」と言った。私とのやり取りで多少は血が回るようになっただけ、徐々にいつも通りの彼に戻ってきた。私は彼に新しいコーヒーを入れる。彼が「ありがとう」とゆっくりそれを飲む間に、子ども達を洗面所に誘導して歯磨きを済ませた。リビングに戻ると、今度は二人とも子供番組に釘付けになり、テレビの前で大人しく座っている。

「じゃあ、今パパッと入ってくる」

康徳さんはコーヒーを飲み切ると、カップを流しに置いて風呂場へ向かった。しばらくすると、シャワーの音が聞こえてくる。

時計に目をやると、まだ八時を過ぎたところ。今から準備して九時過ぎ出発は流石に早すぎるけど、必要なものぐらい整理しておいてもいい頃合い。お盆のお供えと、道中の子供たちの水分、あとはいつものお出かけセット、と。酔い止めの薬も出しておかないと。

さつきまで朝食が並んでいた食卓に、荷物がどんどん固められていく。今回はパパッと日帰りだから、いつもより量は少ない。トローチタイプの酔い止め薬も、カバンの横に添えておく。

実家近くの駐車場も探しておかないと。牧人も車で来ると言ってたし、実家の

空きスペースはそつちに譲ろう。雄輔がもう起きていることを願って、彼に「駐車場、どこかあったっけ」とLINEした。自分で変に検索するより、彼の方が詳しいだろう。すぐに返信がなくても、向こうへ着くまでには何かしら返事があるはず。

シャワーの音が聞こえなくなると、今度は電気シェーバーの音が聞こえてきた。私は流しに残っていた食器を洗い、食器乾燥機つまみを回した。康徳さんは、髪もしっかりセットし終えてリビングに戻ってきた。

彼は私に、「どうぞ」と洗面所の方を示した。私は「ありがとう」と返し、「子供たちお願い」と伝えて洗面所に移った。目元だけ簡単に化粧して、ボサボサの髪へ櫛を入れ、少しだけ整えた。

リビングに戻ると、康徳さんは外行きに格好に着替え、子供たちと楽しそうに遊んでいた。

「牧人くんへの誕生日プレゼントとか、買って行った方がいいの？」

彼は地図アプリを見ながら言った。私は首を振りながら、「いや、いや、いや」と答える。

「了解。じゃあ、混むつもりでボチボチ行こうか」

康徳さんはトイレに向かった。私は亜衣と映美に酔い止め薬を舐めさせ、食卓の荷物を玄関に運んだ。康徳さんがトイレから出てきたら、順番に子供達と私のトイレを済ませて、外に出る。道中の段取りもなんとなく頭の中に描き、指を折り曲げながら一つ一つ確かめた。

初出 令和三年九月二三日 アルファポリスにて公開